

会員各位

岐阜県病院薬剤師会
会長 遠藤 秀治

第 289 回岐阜県病院薬剤師会研修会開催のご案内

拝啓

時下、先生におかれましては、ますますご清祥のことと存じます。
さて、下記のとおり研修会を開催しますので、奮ってご参加頂きますようご案内致します。

敬具

記

日時：平成 26 年 9 月 6 日（土）午後 3 時 00 分より

場所：長良川国際会議場 4 階 大会議室

岐阜市長良福光 2695 - 2 電話(058) 296 - 1200

総合司会 東海中央病院 薬剤部 佐藤嘉孝

1、 会長挨拶

2、 チーム医療と薬剤師

1) チーム医療における薬剤師の役割-栄養管理の実践-

坂下病院 薬剤部 荻野 晃 先生

2) 褥瘡チームラウンドにおける薬剤師の関わり

大垣市民病院 薬剤部 各務 智子 先生

3) 乳がん外来化学療法における多職種連携について

木沢記念病院 薬剤部 平出 耕石 先生

参加費：薬剤師会会員 500 円 非会員 2000 円

* 当研修会は岐阜県病院薬剤師会研修制度及び日本薬剤師研修センター研修制度に該当する研修会です。

主催 岐阜県病院薬剤師会

【はじめに】

近年、『栄養管理はすべての疾患治療のうえで共通する基本的医療』という理念のもと多くの施設で NST が誕生し臨床栄養が普及した。一方、臨床栄養において薬剤師が果たす役割は多岐に亘るが、栄養管理において薬剤師が職能を発揮するためには、『薬剤師が担う栄養管理は薬物療法の一環である。』を基本方針とし、薬剤師の専門性を活かした業務の展開が必要である。今回、臨床栄養において薬剤師が果たすべき役割について報告する。

【栄養管理の実践】

臨床栄養のチーム医療において薬剤師に求められている業務の一つが静脈・経腸栄養管理であることは異論のないところであり、薬剤師の真価が問われる業務でもある。特に水・電解質代謝管理は静脈・経腸栄養管理の基本となる業務であると考えられる。さらに腎不全、肝硬変、肝不全、呼吸不全、心不全、膵炎、悪性腫瘍などの特殊病態における静脈・経腸栄養管理では個々の症例に適した各種栄養組成、投与量など入念な栄養処方設計の支援が必要である。臨床現場においてキット化された輸液製剤が多く利用される今日、特殊病態におけるオーダーメイドの栄養処方設計支援や合併症の早期発見・予防と対策等の代謝管理は重要な業務である。また、個々の栄養素の欠乏症対策の支援も重要な業務である。以下に栄養管理において薬剤師が実践すべき項目を示す。

1. 栄養製剤の各種病態時における適応についての情報管理。
2. 不適切な栄養療法施行患者の抽出と是正。
3. 病態に最も適した栄養処方設計支援と効果の評価。
4. 栄養療法に伴う合併症の予防と対策。
5. 特定の栄養素における過不足の評価。
6. 代謝動態を改善する治療支援。
7. 栄養治療におけるエビデンスの構築の取り組み。

【結論】

現在の臨床栄養は安全性、QOL などの観点から経口、経腸栄養を優先することが原則である。また、低栄養予防のため嚥下機能や口腔ケアへの取り組みが重要とされている。しかし、臨床現場では静脈栄養を必要とする患者が存在しているのも事実である。薬剤師が栄養管理で果たす役割は TPN, PPN, EN 等の栄養処方設計と合併症対策に携わり、さらに代謝動態を改善するための治療支援を行うことである。また、見過ごされてはならない栄養素の欠乏に関する早期発見とその防止対策の支援も薬剤師の役割であると考えられる。

褥瘡対策チームラウンドにおける薬剤師の関わり

各務 智子

大垣市民病院 薬剤部

【目的】平成 23 年 10 月より褥瘡対策委員会の委員（医師、薬剤師、看護師、理学療法士、栄養士）により褥瘡ラウンドが開始された。ラウンドに薬剤師が参加することによる影響および薬剤師の役割について検討した。

【方法】当院で褥瘡ラウンドを行った患者 12 名について、ラウンド前後における栄養状態、創部の変化（DESIGN-R）を電子カルテより後方視的に検討した。

【結果】患者は、平均年齢 72.2 歳（男性 6 名、女性 6 名）、原疾患は、骨折 4 名、心不全 2 名、悪性腫瘍 2 名、その他 4 名であった。褥瘡ラウンド前後において、栄養状態の改善がみられたのは 6/9 件 (67%)、深さの改善は 3/12 件 (25%)、浸出液の改善は 3/10 件 (30%)、大きさの改善は 5/12 件 (42%)、炎症の改善は 2/4 件 (50%)、肉芽組織の改善は 2/12 件 (22%)、壊死組織の改善は 3/12 件 (33%) であった。また、薬剤師が処方提案（軟膏剤の変更、処方の追加）を行った事例は 7 件あり、そのうち提案通りに処方されたのは 4 件であった。処方提案を行った事例では、栄養状態、深さ、大きさ、浸出液、炎症の改善がみられた。

【考察】薬剤師が、軟膏剤、輸液等について情報提供し、必要であれば処方提案してることが褥瘡の改善に繋がると考えられた。ラウンドにより連携を深め、各職種が専門性を生かすことが重要である。

乳がん外来化学療法における多職種連携について

社会医療法人厚生会 木沢記念病院 薬剤部・通院治療センター
平出 耕石

【はじめに】近年，がん化学療法は患者の QOL 維持・入院 DPC 導入等の理由により，通院での実施が主流となっている。繁忙となりがちな外来診療業務のなかで，質を保ちつつ効率的ながん化学療法を実施するためには，各スタッフ間の緊密な連携体制が重要となる。今回，乳がんをはじめとした外来化学療法業務に対するチームでの取り組みについて紹介する。

【概要】当院における外来がん化学療法は，診療科，外来がん化学療法部門（通院治療センター，Ambulatory Treatment Center: ATC），薬剤部，看護部，栄養課，地域医療連携課および医事課等が連携することにより実施している。また，今年 4 月より乳腺外科および形成外科スタッフから構成される『乳癌治療・乳房再建センター』が新設されるとともに，乳がん関連疾患に特化しより質の高い診断・治療およびケアを実践する目的で多職種からなる『Breast Care Team』を立ち上げ，その活動を開始したところである。このなかで，外来専任薬剤師は病棟専任薬剤師と連携し多職種と協働した薬学的アプローチの展開を試みている。さらに，薬剤部では近隣の保険薬局薬剤師との内用抗がん薬含有レジメン等に関連した情報共有を通じて，院内外での患者フォローアップ体制を構築している最中である。

【結語】チームでの活動を通じて，患者情報の効率的な共有が可能となった。また，スタッフの役割を明確化することにより，各々の業務が円滑化された。さらに，事前にスタッフ間で協議・作成・システム登録した支持療法セットを使用することで，医師は診療科・経験如何に関わらず即時の副作用・緊急時対策施行が容易となった。薬剤師・看護師は，有害事象モニタリング時に主治医了解のもと，必要な対策を迅速に行うことが可能となった。今後，これまでの活動の効果を十分に評価・検証したうえでさらに質の高いものとなるよう改良を加えていきたい。

学術講演会のご案内

謹啓

時下、先生におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
さて、このたび下記のとおり学術講演会を開催させていただき運びとなりました。
ご多忙中誠に恐縮に存じますが、万障お繰り合わせの上ご出席賜りますようご案内
申し上げます。

謹白

記

日時：平成 26 年 9 月 6 日（土）午後 4 時 30 分より

場所：長良川国際会議場 4 階 大会議室

岐阜市長良福光 2695-2 TEL (058) 296—1200

■情報提供

「持続性癌疼痛治療薬 タペンタ錠について」

ヤンセンファーマ株式会社

■特別講演

座長 須田病院 薬局長 定岡 邦夫 先生

「疼痛経路に関する新知見」

～下行性疼痛抑制経路へのアプローチと慢性疼痛治療の可能性～

名古屋市立大学 大学院 薬学研究科

神経薬理学分野 准教授 大澤匡弘 先生

主催 ヤンセンファーマ株式会社

※ 講演会終了後、グループディスカッションを計画しております。

疼痛経路に関する新知見～下行性疼痛抑制経路へのアプローチと慢性疼痛治療の可能性～

名古屋市立大学大学院 薬学研究科 大澤 匡弘

がん性疼痛は、患者の生活の質を著しく低下させる最大の要因と言っても過言ではない。そのため、発生原因や病態を理解し、使用する薬物のプロファイルをしっかりと理解して適切に疼痛の緩和を行うことが重要である。特に、臨床で用いられるオピオイド受容体作動薬は医療用麻薬と呼ばれ、強力な鎮痛作用を有するためがん患者の疼痛緩和に広く用いられる。医療用麻薬は、がんの進行やその治療に伴う痛みから患者を解放することができるので、積極的がん治療の継続期間を長くする。

痛みは、多数の神経回路により調節されている。一般に、末梢で発生した痛み刺激は脊髄を通り、大脳へ伝えられ痛みとして認識される。末梢から中枢へ痛みの情報が伝わる際に、痛みの情報は脳の各領域に伝えられ、さまざまな反応を起こす。疼痛制御には多くの神経経路が寄与しているが、代表的なものとして脳幹から脊髄へ軸索を伸ばす神経である下行性疼痛抑制経路がある。この経路の代表的な神経伝達物質には、セロトニンやノルアドレナリンがあり、古くからこれら神経系の賦活が疼痛コントロールに重要であると考えられ、治療法が考案されてきた。

がん患者に見られる疼痛のうち、治療に難渋するものに神経障害に起因する疼痛がある。この神経障害性疼痛は、医療用麻薬に抵抗性を示し十分に緩和できないため、鎮痛補助薬を使用することが多い。また、神経障害性疼痛の発症原因には、脊髄における神経細胞の機能変化のほかに、神経系細胞であるグリア細胞の機能変化が必要であることも示されている。グリア細胞の中でも、アストロサイトやミクログリアの活性化は、神経細胞のシナプス伝達を促進するため、脊髄における痛覚伝達を亢進させる。これらグリア細胞の活性調節が、難治性疼痛のカギを握っており、新規の薬物だけではなく既存の薬物の再評価も現在行われている。

本講演では、脊髄における下行性疼痛抑制経路に関する最近の知見を解説し、神経障害性疼痛で見られる神経細胞やグリア細胞の機能変化に対する下行性疼痛抑制経路の賦活化の影響に関する最近の報告を整理する。また、臨床で使用される各種医療用麻薬の薬理作用発現機序の違いについて考察して、薬学的観察に基づいた最適な慢性疼痛の薬物治療法提案を可能にする基礎的な観点について紹介したい。

薬剤師が薬物治療の提案に積極的に関わり、適切な薬物治療を実践することが、疼痛緩和の領域でも最良の治療を可能にする。その達成のためには、薬理に関する知識のほかに、疼痛制御に関する生理学や解剖学の深い知識が必要である。本講演がその一助となることを望んでいる。

略歴

平成 26 年 7 月 1 日 現在

ふりがな おおさわ まさひろ
氏名 大澤 匡弘

学歴および主な職歴

1994 年	3 月	星薬科大学 薬学部 薬学科 卒業
1994 年	4 月	星薬科大学大学院薬学専攻科博士課程前期入学
1996 年	3 月	星薬科大学大学院薬学専攻科博士課程前期修了
1996 年	4 月	星薬科大学大学院薬学研究科博士課程後期入学
1999 年	3 月	星薬科大学大学院薬学研究科博士課程後期修了
1999 年	4 月	Medical College of Wisconsin, 麻酔科 博士研究員
2001 年	9 月	East Tennessee State University, 医学部 薬理学教室 助教授
2003 年	4 月	九州保健福祉大学 薬学部 薬理学第 2 講座 講師
2007 年	4 月	星薬科大学 薬物治療学教室 講師
2010 年	10 月	名古屋市立大学大学院薬学研究科 中枢神経機能薬理学分野 准教授
2010 年		愛知学院大学 薬学部 非常勤講師
2011 年		名古屋工業大学大学院 非常勤講師
1995 年	5 月	薬剤師免許 (登録 第300875号)
1999 年	3 月	星薬科大学大学院より学位授与 薬学博士
2006 年	5 月	認定実務実習指導薬剤師育成ワークショップ修了 (第06-01567号)

緩和領域における主な活動

2007 年	より	日本緩和医療薬学会 評議員
2007 年	より	日本緩和医療薬学会 総務委員
2008 年	より	日本緩和医療薬学会 試験委員
2009 年		日本緩和医療学会緩和医療ガイドライン作成委員会がん性疼痛ガイドライン作業部会
2010 年	10 月	第4回藤田保健衛生大学病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2011 年	3 月	第5回藤田保健衛生大学病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2011 年	7 月	第6回藤田保健衛生大学病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2011 年	10 月	第7回藤田保健衛生大学病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2011 年	11 月	第2回トヨタ記念病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2012 年	3 月	第8回藤田保健衛生大学病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2012 年	より	日本緩和医療薬学会 編集委員
2012 年	7 月	第9回藤田保健衛生大学病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2012 年	9 月	第10回藤田保健衛生大学病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2013 年	2 月	第11回藤田保健衛生大学病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2013 年	6 月	第3回トヨタ記念病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2013 年	6 月	日本緩和医療薬学会 理事、知的財産管理委員会副委員長、総務委員、財務委員
2013 年	7 月	第12回藤田保健衛生大学病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2013 年	9 月	第13回藤田保健衛生大学病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2013 年	12 月	第2回痛みについての勉強会 講師
2014 年	2 月	平成25年度 名古屋記念病院 緩和ケア研修会 ファシリテーター
2014 年	2 月	平成25年度 名古屋市立大学病院緩和ケア研修会 ファシリテーター

◆所属学会◆

日本緩和医療薬学会 (理事、評議員)
日本緩和医療学会 (緩和医療ガイドライン作成委員会がん性疼痛ガイドライン作業部会)
日本疼痛学会
日本薬理学会 (評議員)
日本精神神経薬理学会 (評議員)
日本薬学会 (薬理系薬学部会若手世話人)
日本神経科学会
日本糖尿病学会
Society for Neuroscence
American Diabetes Association